

平和憲法・9条をまもる 岩手の会 ニュース No.56

2010.4.6

発行：平和憲法・9条をまもる

岩手の会 事務局会議

連絡先 県生協連・県消団連

TEL019 - 684 - 2225

FAX019 - 684 - 2227

差別される沖縄、基地問題を他人事とせず行動を

戦争も基地もいらぬ

3. 20世界の平和を願う市民のつどいin岩手

(3月20日岩手県公会堂、400名参加)

3月20日は2003年にイラク戦争が始まった日であり、毎年この日に「世界の平和を願う市民のつどい」を開催しています。

今年は、作家・政治学者のC・ダグラス・ラミスさんを講師に「日米安保50年の今、沖縄から考える日本」と題して講演をいただきました。ラミスさんはサンフランシスコ生まれで、海兵隊員として沖縄に駐留した経験を持っています。津田塾大学教授などを経て、2000年から沖縄を拠点に執筆・講演活動を行っています。

ラミスさんはまず、沖縄は「太平洋の要石(かなめいし)」だと言われている、と話されました。要石とは眼鏡橋などのアーチの最高部にある石のことで、橋が崩れないための力学的に重要な石であり英語ではキーストーンと呼ばれています。米軍は日米安全保障条約が結ばれて以来、沖縄を世界各地での紛争に直結する軍事基地として利用してきました。

しかし、ラミスさんは、沖縄は軍事戦略の要石ではなく、日本の政治的な要石になっている、と話しました。沖縄はとても人気のある観光地で毎年約500万人が沖縄を訪れるが、基地などを見てきても何も行動しない人がほとんど。基地だらけの沖縄を利用して平和な日本のアーチが崩れないようにしている。沖縄は日本であって日本でないような存在。東京でも岩手でも基地のある日本に住んでいる。沖縄は差別的な扱いを受けている、と話しました。



また、普天間基地移設問題について、「移設ではなくて廃止」という意見がある。しかし廃止は素晴らしいように聞こえるが、米軍自体を廃止することはできず、基地を残すことになる。どこに基地を移設すると決めても反対運動が起こる。辺野古ですでに反対運動が起こっている。反対運動が起こるかも知れないところには基地を置けないが、すでに起こっているところには置ける。差別以外に説明がつかない。グアムもアメリカの植民地のようなものでこれもひどい話だと語りました。

ラミスさんは日本語が上手で優しい語り口でしたが、沖縄に住んでいる立場から鋭い視点で講演をして下さいました。私たちは、沖縄の基地問題や世界で起きている戦争を他人事ではなく自分達、全体の問題として真剣に考えなければならないとあらためて深く心に刻みました。

集会終了後、参加者全員でピースパレードを行い、市民に平和の大切さを訴えました。

今月の署名行動

春になりました。4月から街頭での署名行動を再開します。
9日(金) 12:00~12:45 今年初の行動です。是非参加ください!

地球上から核兵器をなくそう

NPTニューヨーク行動へ署名とともに行ってきます

昨年の秋から取り組みをすすめてきた、「非核三原則を守り、世界から核兵器をなくすために積極的な役割を果たすこと」を日本政府に求める署名は61,438筆(写真)「平和を願うメッセージ」は347通が寄せられました。

3月29日、NPT代表派遣2名はじめ県内生協の代表5名が、民主党山根副幹事長、外務省西村政務官へ要望書とともに提出。“子どもたちへ戦争のない平和な未来を手渡したい”という組合員の思いを伝えました。



前列がニューヨークに行かれる方々です

また、岩手県原水協では3日(土)にNPT参加者の団結式を行い、32,000筆を超える署名が集まっている事が報告されるとともに、代表者それぞれが原爆に対する思いやニューヨーク行動への抱負を語りました。このニューヨーク行動へは、岩手から原水協・生協連・被団協・非核の政府などから14名が参加をします。

「沖縄・平和の旅」第2編 ~伊江島が語るもの~

伊江島反戦平和資料館・館長 謝花悦子さんのお話から

那覇から90kmほど北上した北部山林地帯(ヤンバル)の本部(もとぶ)から船に乗って(9km)30分ほどでわずか23平方kmの伊江島に着く。現在、人口5600人のこの小さな島は65年前の沖縄戦で「血染めの丘」と呼ばれた大激戦地だった。そこに民間の反戦平和資料館「ヌチドウタカラの家」があり、口コミで年間1万人も訪れる。それはこの島の戦いの精神が今の沖縄に受け継がれ、中心になった阿波根昌鴻さんの生き様がみんなを励ますからだ。阿波根さんは百歳近く、最近では体調が悪いため、謝花悦子さんが引き継いでいる。《65年前の沖縄戦~伊江島は木一本、家一軒残らない猛攻撃を受けた》小さな島・伊江島に、日本は飛行場や陣地を作って日本軍を送り込み、戦争準備をしたために、米軍のすさまじい攻撃を受け、伊江島は何もない島になりました。生き残った人は、ほかの島や本部に強制移送され、伊江島に2年後返されました。全島が飛行場化されている中に粗末なテントをあてがわれ、年中出る雑草で生き延び(幸い90%は薬草)、10年かかって生活の基盤を築きました。

《10年後、米軍のすさまじい演習と強制立ち退き要求》

戦後10年、漸く落ち着いたころ、152軒に立ち退き命令を出し、基地を作ろうとしました。しかし、リーダー阿波根昌鴻は「非暴力」を貫き「道理」で戦ったのです。そのころの米軍の演習は猛烈を極め、真鍮の実弾演習が続いていましたが、そのうち金がなくなり、鉄の弾やコンクリートと変わりました。実弾ミサイル2個持ち込み、地主である農民の許可がないことを楯に撤去させる事件やベトナム戦争時、模擬核弾頭を使った演習も行われ、核持込への疑念が濃くなりました。その残骸は今も資料館にあります。

《あてにならない現政権》

5月まで引き伸ばしている普天間基地移設問題ですが、根っこは自民党と変わらなかったと期待した分、落胆も大きくなっています。結果が出てからでは遅いので、今から何があっても県外や国外にと心構えをし、その意思を準備しています。戦争は人災です。一人ひとりが自覚し、国を動かして平和を追求したいと思います。伊江島の運動を引き継いで行くために、今後も皆様のご支援をお願いします。

